同志社大学一神教学際研究センター

日本オリエント学会

共催

公開講演会

個人神を通してみたメソポタミアの宗教

● 講　師 ●

なかた　いちろう
中田　一郎

（中央大学名誉教授・日本オリエント学会元理事）

● 日　時 ●

2008年7月26日（土）　午後2時～4時

● 場　所 ●

同志社大学　今出川校地　神学館3階　礼拝堂

○お問い合わせ
同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
TEL: 075-251-3972　E-mail: info@cismor.jp　HP: http://www.cismor.jp/

《プ ロ グ ラ ム》

1）挨 拶　　月本　昭男（日本オリエント学会・会長）

2）講 演　　中田　一郎（中央大学名誉教授・日本オリエント学会元理事）

「個人神を通してみたメソポタミアの宗教」

3）質疑応答　司 会　越後屋　朗（同志社大学神学部・教授）

《講 師 紹 介》

中田　一郎（なかた いちろう）

1937年に和歌山県田辺市に生まれる。1956年県立田辺高校を卒業。1963年早稲田大学第一文学部（西洋史学専修）を卒業。そのまま同大学大学院で翌1964年6月まで学んだ後、フルブライト留学生として米国ヒブルー・ユニオン・カレッジ（1964年9月ー1966年6月）に、続いてコロンビア大学（1966年9月ー1974年10月）に留学、古代オリエントの歴史と宗教を学ぶ。1974年に博士の学位（Ph.D.）を取得。中央大学文学部助教授・教授（西洋史学専攻）を経て、2007年4月より同大学名誉教授。1986年5月から2008年5月まで（社）日本オリエント学会理事。現在、（社）日本オリエント学会監事、日本ユダヤ学会理事、（財）中近東文化センター理事、（財）古代オリエント博物館評議員。

著・訳書、編書（共著・共編を含む）
デニス・シュマント＝ベッセラ著『文字はこうして生まれた』（共訳）（岩波書店、2008年）、『メソポタミア文明入門』（単著）（岩波ジュニア新書、2007年）、日本オリエント学会編『古代オリエント事典』（共編）（岩波書店、2004年）、『ハンムラビ「法典」』（単訳）（リトン、1999年）、日本オリエント学会編『メソポタミアの世界』（共編著）（日本放送協会学園、1988年）、屋形禎亮編『古代オリエント』（共著）（有斐閣新書世界史1、1980年）、『Deities in the Mari Texts』（学位論文、1974年）、他に論文多数。

《講演概要》

メソポタミアの宗教は多神教であると言われ、しばしば一神教であるユダヤ教、キリスト教、あるいはイスラーム教と対比される。確かにメソポタミアでは、１つの都市をとってみても、そこには複数の神殿があり、そこで祭られる神々に供物が捧げられ、例祭が執り行われた。

メソポタミアでは、紀元前３千年紀の半ば頃あるいはもっと以前から神々の名前を集めた神名表が作られた。現存のもので最も網羅的な神名表は「アン＝アヌム神名表」と呼ばれるもので、2000 近い神々の名前が掲載されている。この神名表からだけでも、メソポタミアには多くの神々が存在したことがわかる。しかし、「アン＝アヌム神名表」に代表される神名表は、語彙集の１つであって、もともと神殿や王宮の官僚養成のための教材として編纂されたものであった。そのため、神名表をもって当時のメソポタミアの人々の宗教心を論じるのには無理がある。

これに対し、都市や国家など公的機関によって維持される祭儀の対象となった神々は、都市や国家の安全と福祉を保障してくれるありがたい神々であった。これらの神々は複数あり、都市や国家の命運を左右する神々として重視された。

他方、メソポタミア出土の文献資料を見ていると、「私の神」「あなたの神」あるいは「彼の神」と呼ばれる神が登場する。これが「個人神」で、都市や国家の公的祭儀の対象となった神々と違い、特定の個人と特別な関係にあったことが伺われる。「個人神」は、言わば、自分だけの護衛兵であり、顧問弁護士であり、ホーム・ドクターと言える存在であった。

今回は、この「個人神」とはどのような神で、メソポタミアの人々が「個人神」とどのような関係を取り結び、敬神の念を育てたのか、また万が一「個人神」との関係がこじれると、どのような事態になったのか、などについて話してみたい。そして、「個人神」に対する敬神の念を中心にメソポタミアの宗教をみた場合、これを多神教と呼んで一神教の対極にあるものと考えることが果たして妥当かどうかについても、触れてみたい。

個人神を通してみたメソポタミアの宗教

レジメ

2008年7月26日
同志社大学一神教学際研究センター
中央大学名誉教授・日本オリエント学会元理事
中田一郎

1．はじめに
2．公的祭儀の対象となった神々
3．民間信仰の対象となった神々
4．一人の人間にとって重要な神々
5．個人神崇拝の歴史
6．人名から見た個人神
（1）「わたし（＝名前の持ち主）の神は何某神である」
（2）「わたし（＝名前の持ち主）の神は……である」
（3）「わたし（＝父親？）の神よ（呼格）、……してください！」
（4）「わたし（＝父親）の神は……してくださった」他
（5）その他
（6）注意事項
7．個人神の祭儀
8．文学作品の中に現れる個人神
（1）『人とその神』
（2）『知恵の主を讃えよう』
（3）『バビロニアの神議論』
9．まとめ

資　料

1．リリアートゥム月（第IX月）27日犠牲用羊支給記録（いわゆる「パンテオン・リスト」）に現れる神々と支給された羊の数および当該神名を含む人名の種類（カッコ内）

第1グループ（公的祭儀でも民間信仰でも重要）

アッドゥ（アダド）	6匹（170種）
ダガン	6匹（148種）
シャマシュ	6匹（100種）
エア	6匹（56種）

第2グループ（公的祭儀では重要だが、民間信仰では重要でない）

ディリートゥム（女神）	7匹（5種）
ベーレト・エカリム（女神）	6匹（2種）
イトゥール・メル	6匹（6種）
ネルガル	6匹（3種）
ニンフルサグ（女神）	6匹（4種）
アンヌニートゥム（女神）	6匹（0種）

第3グループ（公的祭儀では重要でないが、民間信仰で重要な神々［＊印付き］）

シン＊	2匹（97種）
イシュタル（女神）＊	2匹（90種）
キシートゥム（女神）	2匹（4種）
ベーレト・アガディ（女神）	2匹（1種）
ハナト（女神）	2匹（14種）
ナンニ（女神）	2匹（6種）
マーラト・イルティム（女神）	2匹（0）
ヒシャミートゥム（女神）	2匹（1種）
イギ・クル	2匹（2種）
ヌムシュダ	2匹（7種）
天空のシャマシュ	2匹（0）
王宮のイシュタル（女神）	1匹（0）
イシュハラ（女神）＊	1匹（27種）
ベーレト・ヒツァーリ（女神）	1匹（0）
ニンカラク（女神）	1匹（1）

2．マリ出土の男性名に頻繁に現れる神々と女性名に頻繁に表れる神々

男性名に現れる神々		女性名に現れる神々	
イル／エルおよびAN	267種	アンヌ（女神）	48種
アダド（variantsを含む）	165種	イシュタル（女神）	41種
ダガン	138種	イシュハラ（女神）	22種
シン	91種	マンマ（女神）	16種
シャマシュ	90種	アドゥム（女神）	15種
イシュタル（女神）	49種	カッカ（女神）	15種
リム	49種	アヤ（女神）	10種
エア	48種	ダガン	10種
エラハ	39種	シャマシュ	10種
ハンム	36種	タブブ（女神）	9種
エラ	26種	エア	8種

3．王碑文および書簡に現れる個人神

（1）古バビロニア時代マリ出土の書簡（ヤスマハ・アッドゥ→イシュメ・ダガン）

「この国を悩ましているリダー達に関して言えば、あなたの神が彼等をあなたに引き渡したのです。」（ARM V 2:5'-7')

（2）古バビロニア時代マリ出土の書簡（ジッバトゥム→アバヤ／ヤスマハ・アッドゥ？）

「どうかダガンとあなたのお側に立つあなたの神があなたを助けに来てくれ、（そのお陰で）あの町を占領し、敗北させることができますように。そうすれば私達は名声を博することができるでしょう。あなたが以前に（敵を）敗北させたことを聞いて非常にうれしく思いました。」（ARM X 107:20-28)

4．人名から見た個人神

（1）「わたし（＝名前の持ち主）の神は何某神である」

「わたしの神」とされる神々：Abba（女神），Addu, Dagan, Epuḫ, Eraḫ, Ištar（女神），Iškur, Kakka（女神），Malik, Mamma（女神），Matar, Neḫim, Numušda, Rasap, Sîn, Šakin, Šamaš

（2）「わたし（＝名前の持ち主）の神は……である」

わたしの神は：わたしの守り（*-andullī*）
：わたしの扶養者（*-ašraya*）
：わたしの医者（*-asīya*）
：わたしの生命力（*-baštī*）
：よい（*-damiq*）
：わたしの力（*-emūqī*）
：わたしの義理の兄弟（*-ḫatnī*）

：助け手(-ḫāzir)
：わたしの抱擁者？(-*ḫaznaya*)
：わたしの家族(-*kimtī*)
：揺るぎない(-*kūn*)
：わたしの守護女神(-*lamassī*)
：わたしの守衛(-*maṣṣārī*)
：わたしの正義(-*mīšarī*)
：わたしの助言(-*milkaya*)
：完全にするもの／癒す者(-*mušallim*)
：わたしの応答者（？）(-*mutaplī*)
：わたしの光(-*nērī*)
：偉大(-*rabi*)
：高められる(-*rām*)
：わたしの洪水(-*riḫṣī*)
：正しい(-*ṣaduq*)
：わたしの太陽(-*šamšī*)
：よろこび（？）(-*samuḫ*)
：良い(-*ṭābi*)
：わたしの救援隊(-*tillatī*)
：わたしの頼り(-*tukultī*)
：わたしの？(-*zannī*)
：わたしの母(-*ummī*)

（3）「わたし（＝父親？）の神よ（呼格）、……してください！」

個人神に対して呼びかけ、懇願するタイプ。このタイプの人名からは個人神に対するよりパーソナルで切実な感情を読み取ることが出来ます。

わたしの神よ、哀れんで下さい！(-*ḫannam*)
：わたしに食料（配給）を与えて下さい！(-*ašranni*)
：応答して下さい！(-*atpalam*)
：恥をかかせないで下さい！(-*ay-abāš*)
：わたしを憐れんで（許して）下さい！(-*gimlanni*／-*gumlanni*)
：わたし（の罪）を許して下さい！(-*puṭranni*)
：わたしを愛して下さい！(-*rēmanni*)
：戻ってきて下さい！／もう一度……して下さい！(-*tūram*)

（4）「わたし（＝父親）の神は……してくださった」他

このタイプの人名は、個人神に対して、子供（男児）を与えてくれたことに対する感謝を表明している場合が多い。

わたしの神は：（男児を）与えて下さった(*Iddin-ilī*)
：（亡くなった子供を）補って下さった(*Ilī-eriba*)
：叶えて下さった(*Ilī-imguranni*)

：高めて下さった（*Yarīm-ilī*）

他に、「わたしの神の哀れみ（*Gimil-ilī*）」「わたしの神の光（*Nūr-ilī*）」「わたしの神の贈物（*Qīšti-ilī*）」「わたしの神の子供（*Apil/Bīn/Mār-ilī*）」「わたしの神の創造物（*Lipit/Nabī-ilī*）」なども、おそらく子供（男児）を与えてくれたことに対する感謝の表明と考えられる。

（5）その他

「わたしの神よ、わたしは疲れました！（*Ānaḫ-ilī*）」

「わたしの神を賛美せよ！（*Ḫitlal-ilī*）」

使用文献

中田一郎「マリにおける公的祭儀と民間信仰—パンテオンに関連して—」『オリエント』19/1、1976年、1-15頁.

中田一郎「古代メソポタミアの人々と神々—紀元前2千年紀の個人神信仰を中心に—」『中央評論』204号、1993年、26-33頁.

G. Dossin, *Correspondance de Iasmah-Addu*, Archives Royales de Mari (ARM), V, Paris, 1947.

G. Dossin (ed.), "Le panthéon de Mari," *Studia Mariana*, Leiden, 1950, pp. 41-50.

G. Dossin, *Correspondance féminine*, ARM X, Paris, 1978.

D. R. Frayne, *Presargonic Period*, RIME, 1, Toronto, 2008.

I. Nakata, "On the Official Pantheon of the Old Babylonian City of Mari as Reflected in the Records of Issuance of Sacrificial Animals," *ASJ* 13, 1991, pp. 249-258.

I. Nakata, "Pupular Concerns Reflected in Old Babylonian Mari Theophoric Personal Names," in E. Matsushima (ed.), *Official Cult and Popular Religion in the Ancient Near East*, Heidelberg, 1993, pp. 114-125.

I. Nakata, "A Study of Women's Theophoric Personal Names in the Old Babylonian Texts from Mari," *Orient* XXX-XXXI, 1995, pp. 234-253.

J. B. Pritchard (ed.), *The Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament* (*ANET*) (revised and enlarged edition), Princeton, 1968

H. Steible, *Die altsumerischen Bau- und Weihinschriften*, Teil I, FAOS, 5/1, Wiesbaden, 1982.